
ホテルのニュースレター

日本ホテルの会 2022/5 第 94 号

30 周年特集号 (1)

日本ホテルの会設立 30 周年に際して

編集事務局

1991 年 11 月に第 1 回の「日本ホテルの会」設立準備委員会が開催され、1992 (平成 4) 年 4 月に任意団体としてスタートしました。そして同年 10 月に東京の経団連ホールにて第 1 回目の「ホテルを通じて身近な自然環境を考える」シンポジウムを開催しました。今年度で、ちょうど設立 30 周年となります。

2017 (平成 29) 年度の 25 周年目には、11 月に「日本ホテルの会のあゆみ・25 年」と題して矢島名誉会長に基調講演を頂き、ホテルのニュースレター 76 号を 25 周年特別号として、シンポジウムの講演内容と 25 年間の役員の異動や活動内容の変遷などを記しました。詳しい沿革は、今後ホームページ (HP) に掲載して参ります。

今年度は、30 周年記念事業として、次のような内容を企画しております。1) 機関紙「ホテルと人里」の PDF ファイル化と HP での公開、2) ニュースレターの目次のリスト化と HP での公開、3) シンポジウムでの 30 周年企画、4) ニュースレターでの 30 周年特集、5) ホテル図鑑の出版計画などです。特に 30 周年に合わせた企画ということではないのですが、これまで整備されていなかったところを、この機会に実行して参ります。

ニュースレターにおいては、今年度を 30 周年特集号として、会員の皆様からの声を中心に紹介していこうと思います。個人情報の保護に関する法律の制定以降、会員名簿を配布しておりませんので、ニュースレターを情報交換の場として、会員の皆様の活動やご所属のホテルの会のご紹介などを通して、ご活用して頂けれ

ばと思います。皆様からの原稿はいつでもお受けしておりますが、この機会に奮ってご投稿下さいますよう、お願い致します。

(編集事務局 鈴木浩文)

身近な自然を考え続けた 30 年を振り返る

日本ホテルの会 会長 本多和彦

日本ホテルの会は、1992 年の設立以来、30 周年の節目を迎えることになりました。こうして続けて来ることができましたのは、会員のみなさまの厚いご支援と多くの先輩のご尽力の賜物と感謝申し上げます。

さて、30 年前と現在でホテルの住む環境、私達の身近にある自然はどう変わったのでしょうか。この 30 年で「持続可能な開発」(サステイナブル)、生物多様性(バイオロジカルダイバーシティ)そして SDGs (エスディーゼーズ)という環境に関する言葉が浸透してきています(SDGs では、自然環境はその一部ですが)。こうした言葉を、私達の社会が受入れ、日常の中で意識されるようになってきているということは、確実に環境を自らのものとして考える世の中になってきている、それは間違いないと思います。例えば、生物多様性を保つために、外来生物は持ち込まない、自然の中の生き物を持ち帰らないということを説明すれば、多くの人が理解してくれます。では、今自然環境が 30 年前に比べて、劇的に良くなっているかと問われたら、みなさま如何でしょうか。様々な見解が示されると思いますが、「よくわからない」とか「良くも悪くもなっていない」とか曖昧な答えも多いのではないかと思います。ずっと見ているのではないので、わからない、なんとなく悪くなっている印象、というような人もいるかも知れませんね。私のように、当会で 30 年、仕事でも水処理や海・里山の環境にそれなりに接してきた身としては、良くしようと努力してきた部分は、良くなっていると感じています。ですが、その一方で強く感じていることは、身近な自然の荒廃は依然として続いているということです。三浦半島の樹林地は、薪炭林などで利用されてきた里山林ですが、多くの樹林は人の手が入らず荒れてしまっています。こうしたことが、各地で問題となっているナラ枯れを引き起こす一因とも言われています。谷戸田

なども同様です。耕作が放棄され、荒れてしまって、過去にここがたんぼだったとは思えないような場所も多くあります。人の手が入らず荒廃したところを、人の手によって再生する、どうしたらこれが実現できるのでしょうか。日本ホタルの会は、この30年多くの地域のみなさまと接点を持ち、その熱心さに心打たれ、感心させられてきました。こうした市民団体の活動は、参加者の熱意で支えられ、こうした活動のある場所では、確実に環境が保全・再生されてきています。こうした活動の継続が、身近で心地よい自然環境を未来につなげていくものと思いますが、多くの成果を上げてきている市民団体も、世代交代が進まず、高齢化等により活動が縮小してしまうことがあると聞いています。

20世紀後半から水質汚濁や開発などに対する市民団体等による保全活動が盛んになりました。21世紀に変わる頃には前述のような環境への意識の高まりが生まれました。そして、次は、一人ひとりが持つそのエネルギーを、市民団体だけに頼るのではなく、一人ひとりの行動につなげていくことが求められているのだと思います。

現在の大きな環境課題として、地球温暖化に伴う気候変動や生物多様性の保全がありますが、そういった課題解決も、国や自治体の政策とともに、人々の草の根的な行動が目標の達成に不可欠と考えています。そのために、一人ひとりの思いと、そして、その思いを行動に移すことのできるシステムが必要と考えています。日本ホタルの会が、そうしたシステムの一つとして、みなさまの思いに寄り添うことができる存在になることができれば、素晴らしいと思います。

30周年を記念するこのニュースレターの中で、私なりにこれまでの30年を振り返ってみました。今を考え、そして未来につなげ、次の30年後に振り返る時、豊かで心地よい自然が、人々の暮らしの中に当たり前にある世界になっていることを夢見て、日本ホタルの会30周年にあたってのあいさつとさせていただきます。

引き続き日本ホタルの会にご指導、ご鞭撻賜りますよう、よろしくお願いいたします。

まさに「光陰矢の如し」

日本ホテルの会 理事 井上 務

お月様とお日様と雷様が旅をするという江戸小噺があります。宿に泊まった翌朝、雷様が目を覚ますとお月様もお日様もいません。宿の方に「お月様とお日様は？」と問うと「暗いうちにお発ちに…」と。そこで雷様は「月日がたつのは早いものだなあ〜」。「雷様はどうされます？」に「わしゃ〜、夕立に！」との落雷オチがつくという小噺です。

まさに月日が経つのは早いもので「日本ホテルの会」は発足から 30 年という佳節を本年迎えることになりました。30 年前、ホテルとはほとんど無縁だった私。「日本ホテルの会」の皆様から実に多くのことを学ばせて頂きました。特に設立当初から「日本ホテルの会」に携わり、支えてこられた皆様には深く感謝をいたしております。

「平」成 4 年発足、30 年の時が過ぎ、令「和」4 年、「平和」とは言えない落ち着かない世の中です。その世の中の「世」という字には「十」が三つ。「世」には一世代が 30 年との意味があるそうです。ホテルにとってのこれまでの 30 年、これからの 30 年を考えてみたいと思っております。

ホテルに深く関わるようになって 20 数年、古稀を過ぎ白髪となりました。生まれ育った多摩川上流の街で静かに暮らす下流老人ですが、4 月になると近くの多摩川支流に幼虫の上陸確認に出かけます。今年は 4 月 22 日に上陸が始まりました。例年より数日早い上陸でした。短絡的に温暖化と結びつけるつもりはありませんが、例年より早い上陸確認が少し不安です。カミナリを伴うゲリラ豪雨や大型台風がホテルやカワナたちが棲む小川を濁流にしないことを願っています。カミナリは「神様が鳴る」。稲妻は稲の生育を助ける「稲」の「妻」。雷神様には優しい慈雨をお願いしたいものです。

次の 30 年、発足 60 周年を迎えた頃には「脱炭素社会」が実現（？）。前途の多難が予見されるので疑問符付きではありますが期待しています。その時は、お月様とお日様と雷様が楽しく穏やかに旅することができる時代、ホテルは優雅に

夜空を乱舞しているに違いありません。私がそれを見届けるには百歳を超えないといけません。ちょっと無理そうなので若い皆さんに大いに期待しているところです。

ホテルと共に生きる学び舎

日本ホテルの会 会員 板垣和生
東京都福生第七小学校コミュニティ・スクール委員会 委員長

私たちの住む地域は、東京都の西、多摩地域にある人口 6 万人弱、一般的に横田基地がある街としてご存知の方がおられると思います。市内には都立高校 2 校のほか、市立の中学校 3 校、小学校 7 校があり、そのうち福生第七小学校は西部の多摩川に近いところに位置しています。

2019 年春、本校がコミュニティ・スクール委員会の指定校^{※1}となり、その活動のひとつに持続可能な社会の実現に向けた「地域環境を生かした教育」があります。かつて、校内ビオトープ（ふれあいの泉）にホテルが生息していたとの噂があり、また、近隣の「福生ほたる公園」にゲンジボタルが自生していて、その復活の可能性を探っていました。

※1 コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）は、学校と地域住民等が力を合わせて学校の運営に取り組むことが可能となる「地域とともにある学校」への転換を図るための有効な仕組みです。コミュニティ・スクールでは、学校運営に地域の声を積極的に生かし、地域と一体となって特色ある学校づくりを進めていくことができます。法律（地教行法第 47 条の 5）に基づいて教育委員会が学校に設置する学校運営協議会には、主な役割として、

- ・校長が作成する学校運営の基本方針を承認する
- ・学校運営に関する意見を教育委員会又は校長に述べるができる
- ・教職員の任用に関して、教育委員会規則に定める事項について、教育委員会に意見を述べるができる

の 3 つがあります。『文部科学省ホームページ』抜粋

本校ビオトープは、校庭の東北側の峽下（ハケシタ）から流れ落ちる「縞屋（シマヤ）の滝」の湧水を一部引き込み、4つの池にゆっくり注ぎ込んでいます。

生息する植物は、ホオバ・コブシ・クレソン・ササなど多彩で、更地の部分は少なく感じます。動物は、アメンボ・ナンバンカワエビ・ナガメ・ケラ・カワニナ・サカマキガイ等、また時折、カルガモなどが飛来します。

2020年春、このビオトープ生息に適していると思われる「ヘイケボタル」の幼虫150頭とカワニナ・マシジミ・ヒメタニシ相当数を「日本ホタルの会」から提案支援いただき、3年生児童と一緒にヘイケボタルの幼虫を放流しました。放流後、週2～3回学校開放する夜間のナイター照明や校外街灯から保護するため、ビオトープの一部に遮光ネットを張り、日暮れから21時ころまで張り込み観察を始めました。放流直後から天候・気温・湿度・水温（15℃前後）を計測し、その夜から上陸の様子を観察しはじめました。5月29日に成虫羽化を初めて確認し、オス1頭を最初に採取してから徐々にメスを加えて理科室の採卵装置に確保。以後、7月13日に採卵装置の水トレイに初めて幼虫をみつけ、エアレーションをしながらサカマキガイとカワニナを給餌しはじめました。

<2020年>

4月17日、ヘイケボタル幼虫150頭放流・上陸開始

5月29日、ヘイケボタル成虫羽化

※連日、7～8頭を数えたがピーク時は17頭

6月10日、ゲンジボタル成虫初観察

※自生していたと推察、連日2～3頭

7月11日、ゲンジボタル成虫観察終了

※ゲンジボタルの採卵・孵化は失敗し断念

7月13日、ヘイケボタル幼虫孵化・給餌開始

7月18日、夜間観察会

7月29日、ヘイケボタル孵化幼虫数78頭

7月30日、ヘイケボタル成虫確認終了

2020年春から、「七小コミュニティ・スクール委員会」が「七小ホタルプロジェクト」を本格的に開設して、3年生児童を中心に「総合的な学習」に取り入れました。3学期に「冬のビオトープはナゾだらけ」として、ビオトープで光っていたホタルや他の生き物が、いま何をしているだろう等の学習をしました。そして、

2021 年の新学期に入り新 3 年生に「ホタルの生態とビオトープ」をテーマにした授業を始めました。



ホタル特別授業

日本ホタルの会の井上務理事にゲストティーチャーをお願いしホタルの幼虫を放流。この模様は地元新聞社やケーブルテレビでも紹介され、市教育委員会をはじめ多くの方々の反響をいただきました。2022 年 1 月には、公益財団法人東京都教職員互助会（千代田区、阿川千一郎理事長）の第 18 回「ふれあい感謝状 21」の体験活動・社会貢献部門で優良賞に選ばれました。これは、「日本ホタルの会」「福生市教育委員会」をはじめとして、本校ビオトープを活用して「環境や命の学びにつながる活動」（互助会）を高く評価いただいたものと思います。



ホタル幼虫の放流

本年4月、「ホタルだけが光っていれば良い」だけではなく、「SDGs」を念頭におき、児童がホタルの学習を通じ七小ビオトープの様子や環境についての考えをもつようにすることを主眼においた学習をしつつ幼虫を放流しました。今回も地元報道各社の取材を受け、益々気の引き締まる思いです。ホタルに関わってから、まだ3年と経験が浅いですが、持続可能な共生のありかたを、皆で考えられたらとの思いで今後も学んでいく決意です。

街中にホタルが飛ぶ

小山のホタルと自然を守る会 事務局長 畠山光則

京王線の多摩境駅から500メートルの近さに片所（カタソ）谷戸があります。多摩境は「本当に住みやすい街大賞 2022 関東ランキング」の第3位になったところで、谷戸は住宅や大型店舗等に囲まれた1ヘクタール余りのポツンと残された緑地です。そこで毎年ホタルが飛びます。

小山のホタルと自然を守る会は、1998年8月に「ホタルの飛び交う片所谷戸とその周辺の自然を守ろう」と片所町内会の会員を中心に結成されました。そして、2003年、この片所谷戸にはサクラの一種で絶滅危惧種のタマノホシザクラが自

生・群生していることがわかりました。ところが、2008年5月、谷戸やその周辺の宅地開発計画が持ち上がったため、片所谷戸の自然を保護し、緑豊かな環境づくりを求める「請願」の署名活動を行い、11321名の署名の請願書を町田市議会に提出し本会議で採決されました。その結果、谷戸周辺の東側斜面は住宅地になったものの、谷戸の部分は町田市の「小山片所谷戸緑地」として保全されました。

残された緑のオアシス片所谷戸は、春にホシザクラが咲きほころび初夏はホタルが飛び交う貴重な市民の憩いの場あり、地元の小学校の自然学習の場になっています。小山のホタルと自然を守る会は、会員19名のサクラやホタルの専門的知識のない全く素人の市民団体です。水路の整備や草刈りなどの定期的活動と対外的には「片所の里通信」（旧ホタル通信）を年2回程度発行しています、この通信は1998年から発行しつづけ現在は第171号になりました。

小山のホタルと自然を守る会の紹介は、<http://www.oyama-hotaru.com/>をご覧ください。

片所の里通信

かたそ

(旧ホタル通信)

No.171

2022.4.11

<小山のホタルと自然を守る会>

事務局 町田市小山町2545-6

Tel 042(797)5310 畠山

HP:<http://www.oyama-hotaru.com/>

谷戸のサクラ

ホシザクラ以外にもたくさんのサクラが咲きます



ヤマザクラ（トンボ池付近）

オオシマザクラ？（中流域の原っぱ）



片所谷戸はタマノホシザクラだけではありません。トンボ池周辺や東側の棚などにはヤマザクラの大木が5本あります。薄いピンク色の花が若芽と一斉に咲くスケールの大きさに圧倒されます。また、中流域の原っぱのオオシマザクラ（？）は清楚な白い花を咲かせる孤高の一本サクラです。遠い昔から長い年月を重ね毎年咲き続けてきたサクラの大木に敬意を表したいです。

編集事務局より

小山のホタルと自然を守る会の事務局の方より、いつも「片所の里通信」のご連絡を頂いております。その最新版の一部を紹介させて頂きました。ホームページのアドレスも載っていますので、ぜひご覧になって頂ければと思います。また、会員の皆様が所属されている会のホームページと、日本ホタルの会のホームページとの相互リンクを張りたい方は、事務局までご連絡して下さいますよう、お願い致します。会員相互の情報交換・連絡の場として活用して頂けると幸いです。

近況報告

日本ホタルの会 顧問 釜谷美則

ホタルの会の 30 周年おめでとうございます。私は日本ホタルの会の顧問をさせて頂いております。今年度で工学院大学を定年退職することになりました。この会の益々の活躍を期待しています。定年後は、田舎である岩手県のホタルの生息状況を調べてみようと思っています。

日本ホタルの会 理事 井上 務

「日本ホタルの会」発足 30 年の佳節、ニュースレター読者の皆様と慶びを共有したいと思います。ホタルに関する「これまでの 30 年」を振り返り「これからの 30 年」を展望してみたいと思います。

談話会報告：星空を守るくふう

日本ホタルの会 副会長 鈴木 浩文

2022 年 3 月 12 日（土）に、オンラインにて談話会を開催し、20 名ほど参加して頂きました。話題は「ホタルと光害について ―ホタルへの影響と対策事例―」で、私（鈴木浩文）が担当しました。内容としては、1) 生物と光（太陽）との関係、生体リズム、生体リズムを乱す光害、2) ホタルへの光の影響（成虫と幼虫の

活動への影響事例)、3) ホタルへの光害対策事例です。光害対策の事例として2つ紹介しました。1つは、名古屋市の高速2号線高架橋の道路照明で、高架橋下の名古屋城外堀に生息するヒメボタルに配慮したプリズムライトガイドによるパイプ照明です。もう1つは、逗子市の街路灯LED化事業で、ホタルの生息環境に配慮したLED街路灯の開発(パナソニック社)と、その街路灯の設置に関わる行政、地域住民、有識者との連帯した取り組みです。ホタルに配慮したLED街路灯(暖色系の光で、羽根を付けることによって照明範囲の向性性を高めたもの)の開発だけではなく、その設置に当たっては、ホタルが生息する水路面に光を落とさないように1灯ごとに、設置アールの長さや角度を調整し、しかも防犯上の照明基準をクリアするという事例です。この内容は、ホタルのニュースレター No. 77においても紹介しています。

さらに、当会理事の古河さんからは、ホタルの観察現場における光害の事例を紹介して頂きました。来訪者の車のヘッドライトや懐中電灯の明かりによって、ホタルの撮影が障害されるわけですが、1時間のムービー撮影において、光の障害がなかったシーンは、たった8秒しかなかったということです。ホタル観察の現場へは、明るいうちに現地入りすることや、観察時の足元照明、ホタルに懐中電灯を向けないことなど、ホタル観察時のマナー教育についての議論もなされました。

光害については、人間の健康と生活や動植物への影響だけではなく、夜空への配慮も考えられています。小学4年生の理科テスト学習コラム欄に「星空を守るくふう」と題して、街灯の上に屋根のような覆いをつけて地面だけを照らして、空の方向への漏れ光を防ぐ事例が出ていました。「夜でも明るく豊かになった私たちの生活ですが、夜の間に空が明るくなったことで、星が見えにくい状況です。そのために、空が明るくならない街路灯が作られ、美しい星空を守って、それを未来に残したい。」という記事でした。

先の光害対策事例の高速道路や街路灯の照明については、国土交通省の「道路照明設置基準」や日本防犯設備協会の「防犯灯の照明基準」、警視庁の「安全・安心まちづくり推進要綱」などがあり、その基準との折り合いになります。夜空への配慮としては、環境省の「光害対策ガイドライン」があり、照明の不適切な使用による、まぶしさといった不快感や地域景観の悪化などに対する視点からの対策となっています。

かつて八甲田山で天体観測をしていた頃は、隣にいる人が分からないほどの暗闇で、恐怖を感じるほどでした。しかし、星空を見ると、星が手に届くほど近く、自分が宙に浮いているような感覚になりました。小学生の理科のコラムを書いた人は、どのような思いを込めていたのでしょうか。



岩木山山麓（湯段）でのオリオン座小三ツ星の M42 散光星雲

事務局からのお知らせ

事業活動の報告

昨年度は、東京都千代田区の「東京ガーデンテラス 紀尾井町」における「ホテル育成環境の検討」に関する業務を受託しました。ここは、旧赤坂プリンスホテル跡地の再開発で整備されたオフィス・商用施設・マンション・赤坂プリンス クラシックハウスなどから成る複合施設で、西武グループが所有しています。

施設周辺には皇居や赤坂御用地，明治神宮外苑などの都心の貴重な緑地が残されており，それらをつなぐ生態回廊の形成に貢献する取り組みをしています。施設内には「光の森」が設けられ，樹木の保全や生態系に配慮した水辺空間，生物多様性保全の整備が進められています。これらの整備には，故大場信義先生がご指導されてきたわけですが，その後，大場先生の代わりに意見を求められる方を探しているというお話を，大場先生の奥様から頂きまして，日本ホテルの会で引き受けることとなった次第です。



東京ガーデンテラス紀尾井町 光の森内の水路

昨年度は，西武プロパティーズの「光の森ビオトープ」の取り組みについて，「多摩川水系で生育した植物の移植による空間創出」，「水生生物が棲みやすい生態系創出に向けた健全な生態系の構築」，「ヘイケボタル移入元水系環境の保全活動」などについての提言を行いました。今年度は，生物多様性空間の創出に向けた取り組みのランドデザイン構想へと進めて行く予定です。

（編集事務局 鈴木浩文）

談話会のお知らせ

今回もリモートでの談話会を開催致します。演者は、会員の板垣和生さん（東京都福生市）で、本ニュースレターで紹介された福生第七小学校でのコミュニティ・スクール活動の話題を提供して頂きます。事前の参加登録の必要はありません。

日時：2022年6月11日（土）20:00 から 1 時間程度

演題：ホタルと共に生きる学び舎

場所：Zoom（ビデオコミュニケーションツール）での開催

ミーティング ID：885 7639 9675

パスコード：400694

観察会のお知らせ

今年度は、7 月に野外（富士山山麓周辺）でのヒメボタルの観察会を予定しています。詳細は、追ってアナウンス致します。

訃報

2022 年 4 月 26 日、矢島稔名誉会長がご逝去なされました。享年 91 歳でした。心より、ご冥福をお祈り申し上げます。次回のニュースレターを追悼号とする予定です。

ホタルのニュースレター（第94号）

2022年5月25日発行

編集 日本ホタルの会事務局

発行 本多 和彦

〒239-0824 神奈川県横須賀市西浦賀4-11-2-404

本多方（日本ホタルの会事務局）



e-mail: hotarunokaijimukyoku@gmail.com

ホームページ：https://www.nihon-hotaru.com

Facebook: https://m.facebook.com/nihonhotaru

印刷 青森コロニー印刷 東京都中野区江原町2-6-2